

第二章

村田簿記学校
専門学校村田経営義塾
のあゆみ





昭和22年に再建された校舎



明治42年、創立当時の「銀行会社事務員養成所」校舎



旧1号館

旧1号館入口



昭和33年当時の校舎





経理高等課程(昭和58年~平成13年)

村田簿記学校 歴代校長



村田 照子 (第二・五・七代)
昭和50年4月～平成6年3月
平成12年4月～平成13年7月
平成16年6月～平成18年6月



村田 謙造 (初代)
明治42年11月～昭和50年3月



西尾 康三 (第四代)
平成10年6月～平成12年3月



藤井 禧和 (第三代)
平成6年4月～平成10年5月



亀田 光昭 (第八代)
平成18年7月～平成19年3月
専門学校村田経営義塾
平成19年4月～平成21年10月



堀居 英治 (第六代)
平成13年8月～平成16年5月

村田簿記学校

Ⅱ 明治期、大正期 Ⅱ

銀行会社事務員養成所

明治三十九年三月、大阪高等商業学校二ヶ年を修了した村田謙造は上京し、会計事務所（村田会計監査所）を営みながら、簿記と珠算を普及する方法を模索していた。

当時、簿記という学問はまだ一般的なものではなく、一部の専門を志す人々のみに学ばれているにすぎなかった。「国力伸長」が叫ばれている時代に、産業経済の発展の基礎となる経理、記帳の方法を広く国民に浸透させる必要があると謙造は考えていた。

また、簿記に必須の条件である計算力、速算力を高めるため、その道具である算盤の練習も欠くことができないものであった。都市部での珠算教育の遅れを痛感していた謙造は、自らの四ツ珠算盤を押し広める意味を含め、会計事務所と同時に珠算教育にも着手していた。明治四一年、読売新

聞社主催の「全国珠算競技会」に選手として参加した謙造は、参加者一三一名中一三名が選ばれる金杯（優勝）を獲得している。

簿記、珠算の普及には、「学校」が最も適切であると確信していた謙造は、明治四二年「機は熟せり」と開校に踏み切った。

学校では簿記・珠算のみではなく、「人間としての教育」も重要な要素として組み込まれていた。そのため、謙造は、同郷で尊敬する吉田松陰の松下村塾にならった。簿記・珠算を広める松下村塾をとという考えがその底流にあったからである。従って開校に際しては、師弟一体の教育を目指し、寄宿舎制にしている。

しかし、社会情勢をおもんばかると学生募集は一朝一夕にできることではなかった。自ら校名と所在番地を書いた紙を神田界隈の電柱に貼って歩いたという。それでも一五、六名集まった学生たちに対しては、簿記・珠算から雑巾がけまでを教え込んだ。その頃の様子を謙造は

私は朝三時間、昼から三時間、夜三時間教



明治42年創立 銀行会社事務員養成所

えました。学生も少ないし、むろん先生もいません。一人でやってました。さらに午後三時半から一時間、算盤だけの科がありましたのでそこでも教えました。一日一〇時間も教えたことになりません。

と話している。

やがて地方出身の入学者が増加してくると寄宿舎が不足し、謙造は自宅を開放するなどして対応することになった。寄宿舎（寮）制度は、大正一〇年の新築移転でも、また、関東大震災後に再建された校舎においても続行され、寮が設けられていた。

村田照子は、昭和の初めの頃の様子を、こう書いている。

寮生は、昭和五、六年頃まで学校の一隅に住んでいましたので、私も幼い時、春のお花見には、寮生の誰彼の背に負われて上野までつれていってもらったことを、おぼろげながらおぼえています。

銀行会社事務員養成所での生活については、卒業生、木村留七氏（第一章参照）が的確に証言している。

簿記や商事について学ぶことは、まだ一般的で

はなかったが、珠算においてはその必要性を認める人は多かった。「速く・正確に」は誰もが望むところではあったが、それを学ぶという意識は希薄なものであった。商家が我流を伝授するにすぎなかったからである。「よき指導者のもとで学び練習すれば必ず上達する」を旗印に、指導法に自信のある謙造は、珠算教育の場を作る決心をした。

村田速算学校

大正二年六月、「村田速算学校」が併設された。当時の都市部において珠算教育が遅れ気味であったことへ、一石を投じる役割を果たしたと言える。

仕事上最も必要とされる速算を教授することを目的とし、授業科目は次のようなものであった。

（珠算）

加法、減法（読上算、見取算、伝票算）、乗法、除法、簡便算法、利息算、諸等数、開平、開立等（暗算）

加減乗除

男子部と女子部の二部とし、初等科、高等科の二科で、それぞれ昼間部、夜間部に分かれていた。修業期間は全て一ヶ月で、毎月一日が新学期の開



村田謙造先生授業風景

始日である。授業時間は、昼間部は兩科とも午後三時から四時三〇分まで、夜間部は初等科が午後六時から七時三〇分まで、高等科は午後七時三〇分から午後九時までで、全で一時間三〇分でカリキュラムが組まれていた。

入学資格は、小学校卒業以上については無試験であり、また、卒業時には高等科のみ卒業試験が実施されていた。

入学金は一円で、授業料は部・科に関係なく三円であった。

この学校の特色の一つは、珠算奨励のために毎月一回開かれた「速算競技会」である。成績優秀者には金牌、銀牌、銅牌が授与された。

村田簿記学校の学則

新築移転と同時に村田簿記学校と改称した頃の学校の内容は、大正一〇年三月制定の「村田簿記学校学則」によって窺い知ることができる。

それによると、目的は当然「簿記学を専門とし、事務上の最も必要とする速算を練習することにより、商業界での有能な人材の育成」である。

男子部、女子部を置き、修業期間は甲種生三ヶ月、乙種生六ヶ月であった。

授業科目は

簿記学（商業、会社工業、銀行）
商業実務、銀行実務珠算（速算）
授業時間は、午前八時～十一時

午後六時～九時

となっている。甲種生は毎日、午前午後の六時間を受講し、乙種生は毎日三時間授業を受けることと決められている。祝祭日、日曜日は休業としてはいるが、「夏期休業なし」の特記がある。

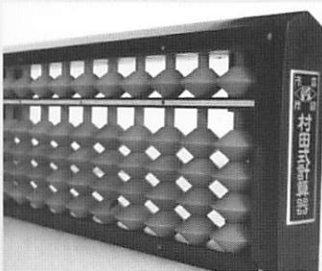
入学資格は高等小学校卒（又は同程度の学力）は無試験であったが、卒業に際しては商業、会社工業、銀行簿記、珠算の四科目の試験に合格することが必須の条件であった。また、入学期は毎月一日と定められている。

学費は、速修金（入学金）三円のほか、授業料は甲・乙種生ともに二五円で、さらに甲種生三回（九円）、乙種生六回（五円）の分納が認められていた。また、科目試験の受験料は、手数料として一科目二円が必要であった。

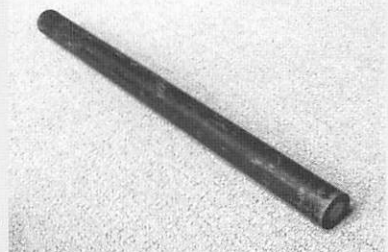
ほかにこの学校の特色は、「研究科」を設置していることであろう。内容は次のようなものである。

研究科

入学資格／中等学校卒業以上の学力があり簿



村田式計算器



ルーラー

（村田記念館所蔵）

謙造が遺したもの
～その1～

§ 村田式計算器 §

現在の算盤は、五を示す玉(五玉)が一つ、一を示す玉が四つ(一桁に玉が五つ)で「四ツ珠ソロバン」と言われている。しかし、江戸時代には五玉が一つのものや二つものがあり、いずれも一玉(地珠)は五つという算盤が使用されていた。当時の計算法には適していたと思われるが、明治期に入ると五玉が一つ、地珠五つの算盤が主流となった。運指法、運珠法の指導と簿記の計算を含む商業計算の方法が進化し、さらに速算が求められると、地珠が五つある必要性はなく、下の一つは無用なものとなった。

そこで謙造は、明治41年春、かねてより懸案していた四ツ珠ソロバンの実現にむけ、地珠を四つにした算盤を作製し、「村田式計算器」として発表、その普及に最善を尽くした。

昭和2年、服部源次郎氏は「珠算十二講」(国際書房刊)で、「東京の村田速算学校校長村田謙造氏は、明治41年春に四ツ珠算盤を創案せられた」と紹介、絶賛している。

画期的な算盤ではあったが、日本全国に行き渡るのには、かなりの時間を要している。五ツ珠算盤が完全に姿を消したのは昭和12年頃で、翌13年に文部省が国定教科書「小学算術」で4年生に四ツ珠算盤を使用させるに及んで、四ツ珠算盤が急速に普及していった。

村田式計算器(四ツ珠算盤)の特色は、その形にもあった。それまでの算盤は上辺が直角であったが、謙造はそれを三角形(山型)にカットしたのである。当時の経理事務担当者は、算盤とともに帳簿の罫線を引くためのルーラー(丸定規・簿記棒)が必要であった。一般的に使用されていたルーラーは、直径一時(約2.54センチ)、長さ一五吋(約38センチ)で、反りを防ぐため檜などの堅い材料を使い、さらに芯に鉛を入れることにより、かなり重量のある(約300グラム)棒であった。そのためルーラーの代わりに算盤の上辺を利用したが、当時安価で精巧にできた商品として風靡していたガラスペンをもってしても罫線は滲むことが多かった。この問題を解決したのが算盤の上辺を定規として利用できる村田式計算器であった。

現代の算盤は、全て村田式と言っても過言ではないが、敢えて謙造が発表当時の算盤に貼付した「村田式計算器」のプレートを張り販売している会社がある。福岡市の梶原商会在それで、潘州(兵庫)で生産している自社製品「大和算盤」を村田式計算器とし、謙造が商品化した当時の姿を留めている。

～「村田式計算器」再び～

堅牢な作りで使い良い算盤を生徒たちに紹介してほしい、と照子校長の前で箱から算盤を取り出そうとしたとき、箱に印刷された文字が校長の目に留まった。「村田式」と記されていたのである。算盤を持ち込んだ人は、村田式が何であるか知る由もなかった。ただその会社では、長年一般的な算盤を村田式とし、競技に出場する選手や幼児が使用するための軽便な算盤を川村式として区別し、間違わぬよう、単に記号として使用したにすぎなかった。話を聞いてその人は、村田式をきちんと広めたいと考え、プレート使用の許可を取り付けた。昭和50年代末期の出来事である。



記の素養がある者に限る。

コース・期間／会計学（監査）六ヶ月

原価計算（英文・簿記）六ヶ月

授業日時／各コース週三日、午後三時～五時

学費／入学金三円、授業料月額三円

但し、簿記学校の在校生・卒業生は、入学金は免除。

学則には、この研究科に關して、特記というべき、次の条文がある。

「卒業生ニシテ本校研究科ニ入り、一ヶ年以上教務に従事シ、且ツ規定ノ理論ヲ研究シタル者ハ簿記教員及ビ分校設立ノ資格ヲ承認スルコトアルベシ」

入学希望者の増加に伴い「全寮制」は困難となったが、教育方針に些かも変化はなく、「師弟同行の教育」の思想が貫かれていた。

校友会の発足

大正一三年一〇月二〇日、校友会発足に向けての発起人会が村田簿記学校で開催された。発起人は二三名（うち職員二名）で、具体化案を提起し検討されている。

猶予期間を置いたのち、大正一五年の会則改正を経て本格的な活動が行われた。当時の会則によれば、事務所は簿記学校内、会長は簿記学校校長とし、会員は客員（教員等関係者）、正会員（卒業生）の二種であった。春秋二回の定期総会のほか年一回の校友会誌の発行が謳われている。会費は年二円であった。この年、会長（校長）、幹事長一名、常務幹事五名、幹事一六名が選出されている。



ソロバンの練習はレコードで！
東京商工會議所修業能力検定試験委員
全国珠算監査大審門委員
村田簿記学校校長・村田女子経理学校校長
村田 謙造 先生 敬 誌

文部省認定
東京商工會議所推薦
(認定番號第三七八號)

珠算能力標準レコード

第三級 讀上算 上下 (10074)
第二級 第一級 讀上算及讀上暗算
◇十時 各一圓五十錢 (10075)

珠算界に
投じた大ヒツ
に會社に學校に官廳に風の如き大歡迎をうけ、珠算能力標準者にとつては絶好の二の腕と賞賛がられて居ります。



算盤レコードの宣伝リーフレット



大正13年再建校舎

謙造が遺したもの
～その2～

§ 謙造の哲学 §

計算五訓

- 1 事業の基礎は計算にあり
- 2 事業の消長は計算にあり
- 3 計算は精密なるべし
- 4 計算は正確なるべし
- 5 計算は迅速なるべし

簿記五訓

- 1 正確記帳、万人明瞭
- 2 毎日記入、毎日試算
- 3 敏捷算入、確実決算
- 4 毎月決算、安全家計
- 5 正常収益、確実納税

謙造は、常に「数」の観念を身につけるよう強調している。何ごとも現状を数字で掲げれば、一目瞭然だからである。「如何なる事業にしても、誠意を以てそれにあたる者は、重要な数字的基礎の下に、あらゆる計画、施設、観察等いずれも数字の力にまたなければ、充分な成果を得ることはできない。社会が秩序的に進めば、ますます数字はその基礎としなければならない」と述べている。この考え方は、「有算者勝」や「算数無私情」に通じるものであり、数の概念は村田簿記学校での教育目標の一つであった。

また、数について謙造は、数学者のそれとは異なり、人間生活に最も身近な数についてであるとし、「私の道において『過去の数』は『未来の数』の指標となる。そして未来の無限なるを想うとき、『数』の必要性和その活用の重要性を知らねばならない」（全国商業高等学校協会会報、第50号）と数に対する哲学を説いている。

～算盤のレコード～

謙造が吹き込んだ「珠算能力標準レコード」がキングレコードから発売されたのは、昭和12年1月のことであった。戦後でこそ語学レコードを始め各種のものが売り出されたが、当時はまったく珍しい存在であった。レコードの多くは流行歌で浪曲、落語などが僅かに混じっていた。レコードは10吋盤（25センチ盤、78回転、その頃は普通の大きさ）で、定価は1円50銭で発売された。内容は、第三級読上算上下、第二級・第一級読上算、読上暗算からなっていた。発売時の宣伝リーフレットには、「文部省では、その優秀性を認めて『認定』を下されました。誰にも独習で勉強出来る様、珠算上達の秘訣を公開した懇切なテキストが添へてあります。珠算検定試験に容易に合格したい方は勿論珠算を短時日に上達したい方はこのレコードにお頼りになることが一番の近道です」と記されている。翌年、文部省は四ツ珠算盤を導入することになった。

村田謙造の著書

- 「最新商業簿記表解と公式」大阪屋書店（大正10年5月）
- 「最新商業簿記 上下二巻」王江堂書店（大正11年1月）
- 「最新銀行簿記」王江堂書店（大正11年10月）
- 「会社簿記講義」王江堂書店（大正13年9月）
- 「最新実践工場会計」王江堂書店（大正14年1月）
- 「最新商業簿記」富山房（昭和2年11月）
- 「受験簿記のねらい所」同文館（昭和9年4月）
- 「商店員自習録」富山房（昭和12年8月）
- 「標準珠算教科書 全四冊」富山房（昭和13年10月）



珠算偶感

あの頃……大正から昭和のはじめ……

村田謙造

私が志を立て、東京神田に現在の村田簿記学校の前身を創設したのは明治四十二年十一月、すでに五十年前前のことである。まだ簿記は世に知る人の少ない時であり、珠算は、その必要性は認められながらも、東京ではまだまだ幼稚な頃である。むしろ地方の方が盛んだったといえる。

珠算、簿記を中心とした実業教育に、身を挺しようとした私の前途は、容易なものではないと思われた。それだけに私は、むしろやり甲斐のあることとして、ひたすらこの道に進むことの決意を固くした。

時は間もなく大正に移り、第一次世界大戦後の落ち着きとともに、漸く一般の人々も珠算に関心を持つようにはなってきたものの、今から思えばまことに微々たるものであった。珠算塾もほとんどなく、僅かに少数の商業学校や、ごく限られた範囲の学校で指導するに過ぎない状態だった。

珠算の発展を妨げた原因の中で、当時としては未だ明治時代からの名残りで、士・農・工・商の階級的意識があったことも忘れてはなるまい。そろばんは商人のもので、高潔な人間の手にすべきものではない、というような誤まれる意識を持った人々が多かったことも事実である。

何とか生徒の興味を惹き、延いては一般の関心を高めようと考えた私は、かつての珠算選手としての経験を基に、競技会を開催することにした。

こうして始めた私の学校主催の競技会は、のちに百回を数えるにいたったが、当時、それは本校生徒を中心とする限られた分野と、特殊な地域に過ぎず、当然満足できるものではなかった。

しかし、この頃から徐々にではあるが、東京には多くの有能の士が集り、やがて盛りゆく珠算のきざしが芽生えていた。

我が国文化の中心である東京に、珠算の花を咲かせる基礎を創ろうと語り合った人々には、村林専之助、高井計之助、神尾錠吉、川村貫治、石上録之助、斎藤仁右衛門、脇田直弥、渋谷直一、山崎与右衛門その他の各氏があった。今はすでに故人となった人々もいるが、なつかしい斯道の先覚者達である。これらの人々の中で、高井計之助、村林専之助、川村貫治の諸氏と私が発起人となり、東京の珠算界の連絡機関として、そろばんの形態から名付けた「五一会」を創めたのは、たしか、大正十一年だったと記憶する。

今は遠くなった大正時代への、郷愁にも似たなつかしい思い出の一つである。

やがて大正も去り、昭和の時代を迎える頃になると、固かったつぼみが漸く開きそめるように、多くの人々の手によって培われた成果が現れてきた。この頃には地方からも気鋭の

士が続々と東京に集ってきた。

昭和三年二月から東京市実業教育局でおこなっていた、市立実業学校珠算奨励会の珠算検定試験を、前期の諸氏などとともに、一般に公開すべく努力し、ついに、これを東京商工会議所に移管せしめ、昭和六年二月、初めてその第一回の珠算能力検定試験を施行することに成功した。これがいま、全国一斉におこなわれている商工会議所の検定試験の始まりである。当時は東京のみでおこなわれ、受験者数百名を数えるに過ぎなかったこの検定試験も、現在は年間数十万の受験者があるという。まさに隔世の感といふべきだろう。

その頃は年一回、厳寒の二月に行われ、検定種目の中に読上算、読上暗算が含まれていたことは、知る人も少なくなってきた。

私も試験委員として各受験場を読み上げて廻った経験がある。暖房装置も現在のようでない寒い教室で、足をがたがたさせ、手をこすりながら試験開始を待った当時の受験生の中には、いまの教員が相当いるのではなかろうか。

この検定試験を一契機として、東京の珠算学習者は漸増し、珠算塾も増加してきた。競技会も招待競技を中心に多く開かれるようになった。中には地方遠征を試みる学校もでてくるようになってきた。

こうして盛り上がってきた珠算熱を、さらに煽ったのは、昭和十一年に、同じく商工会議所の主催で、初めて大がかりな全国珠算競技大会を開催したことだ。当時の東京帝国大学、

いまの東京大学で、全国各地から選ばれた多くの選手達が、出身地名を入れた白だすきを肩に技を競う有様はまことに壮観だった。いまの国民珠算競技大会の前身である。

越えて翌昭和十二年、同じ東京帝国大学で第一回世界教育会議、ならびに汎太平洋教育会議が開催された。その席上、わが国の特技である珠算を紹介するよう要請され、東京の各商業学校から一名宛選抜し、模範演技を公開することになった。私も指導者の一員として読上算をおこなったが、選手達の熟達した指捌きは、世界各国から集った多くの碧い眼の教育者達に、「ワンダフル」を連発させたことである。その印象はいまだに私の脳裡に強く残っている。

以上は私の直接関係した事柄であるが、この頃から珠算は隆盛の一途を辿り、私達関係者を大いに喜ばせたものである。巷にそろばんを抱えた児童、生徒の姿が多くみられるようになったのもこの頃からである。

この時代の若き選手が、いま、日本の珠算界を背負って立っていることを考えれば、私達の微々たる努力も決して無駄ではなかったと考えている。

惜しむらくは、第二次世界大戦の勃発によって、その好むと好まざるとを問わず、幾多の若き俊英を戦野に失ったことである。私の直接指導した有為な青年も多数将来ある身を散らせてしまった。戦争は珠算界にも多大の被害をあたえていることは悲しい事実である。

〔「有算者勝」による〕

Ⅱ 昭和期 Ⅱ

戦時下の簿記学校

昭和改元からの一〇年間は、激動と不景気の時代と言われ、その後は軍事色一色に染められていくことになる。

この一〇年間で、村田簿記学校の学生の質が大きく変化してきた。大正期の入学者の学歴は、小学校卒業者が九〇パーセントを占めていたが、やがてその数字は僅か一〇パーセントを示すに至り、中学校卒業の入学者五〇パーセント、大学、専門学校卒業の入学者四〇パーセントになっていた。

実務教育の必要性が社会に認められ始めたのは、この時期からと言っても過言ではないであろう。村田簿記学校創立以来、三〇年間に及ぶ努力の結晶であった。

昭和四年十一月三日、三階建てコンクリートの近代様式建築の校舎が竣工した。その後、この校舎は、昭和一二年六月二日の夜隣家の電気商店から出火した炎により半焼してしまった。当夜は夜間部の授業中であったが、人的被害を受けることはなかった。しかし、直ちに改築工事を昼夜兼行

し、一ヶ月の速さで完成させ、仮校舎に収容していた学生を迎えたのは七月五日であった。

大正一五年から本格的な活動を始めた「校友会」ではあったが、その後の一〇年間は鳴かず飛ばずの状態が続くことになる。そこで昭和一二年一月一七日、村田簿記学校、速算学校、女子計理学校の「三校合同校友会」を目黒雅叙園で開催した。この総会で、評議員八名、幹事一四六名を新たに選出し、また、校友会の結合強化を図る目的で次の二件を可決した。

- 一、「村田学園新聞（昭和二年八月創刊）」の発行事務を校友有志より役員を出し援助する。
- 二、村田学園新聞の購読料金、年一円を校友は必ず負担すること。

時代はますます戦争の渦中にまきこまれ、「学徒動員」「学生勤労報国隊」「戦時非常体制」などの言葉とともに苦難の時代に突入する。

この頃の簿記学校で特記すべきは、地方からの入学者が多くなったことであろう。例えば昭和一八年三月組（昼間部）の卒業生は四〇名、うち東京に住所がある者二三名（但し、寄宿している者一〇名）であった。ほかは千葉県四、神奈川県、

学生数および教職員数

年度	男	女	合計	教職員
23	213	94	307	7
25	260	120	380	16
28	508	332	840	20
30	973	720	1693	30

※学生は附帯教育を含む
教職員は非常勤を含む

埼玉県、茨城県、福島県各二、北海道、青森県、秋田県、宮城県、栃木県各一となっている。

戦災からの校舎再建

戦争が終結し、急進するインフレーションのなかで、生産の停止と食糧難で社会は混乱していた。学校はそのほとんどが焼失し、復旧にはかなりの時間を要している。村田簿記学校が昭和四年に新築した校舎と同等のものを建設しようとしても物資不足の折で、全く不可能であった。

国民の総「浮浪化」時代と言われた昭和二年は、教育にまで手が回らないのが実情であったが、簿記学校の授業は続けられていた。当時の教員構成をみると、専任教員数は校長を含み二名、事務員一名、非常勤教員七名であった。

昭和二年一月、社会的混乱がやや落ち着きを取り戻した時期に、新校舎が落成した。都内の学校としては早い再建であった。その要因は、学園（特に謙造）の信用度が高く融資が受けられたこと、また、謙造に心酔する建築業者が協力を申し出たことなどであった。しかし、新築の校舎は木造二階建ての上下六教室のみで、事務などは、校舎の向かいの建物を借りて執務しなければならな

かった。

新校舎は落成したが、物資不足の折から内装工事は思うに任せず、窓ガラスさえもきちんと整えるのは不可能なことであった。そのような状況ではあったが、校長宅内の村田簿記学校に比べれば、新鮮でゆとりのある場所であった。

校舎の完成直後に移転し、また、当時倉庫を借用していた村田女子商業学校もここに移転させ、両校の授業が継続された。しかし、六教室では足りず近くの木造二教室を借用せねばならなかった。昭和二年、学生数は八〇〇名を超え、さらに近くの万崎ビルの一、四階を借り受け五教室を増加して対処した。

新校舎での新入生募集は、昭和二三年度生からであったが、その頃の様子は元教員、鈴木正彦氏

【本科】		
銀行簿記	3	
会計銀行簿記	2	
英文簿記	2	
原価計算	3	
会計及監査	2	
珠算	3	
税務会計	2	
実習	4	
修養講座及書道	3	
【遠成科】 (昼間部) (夜間部)		
商業簿記	4	3.5
会社簿記	2	2
工業簿記	1	1
珠算	2	2
修養講座及書道	2	
【専修科】 (選択科目)		
原価計算	4	
会社工業会計	3	
銀行簿記	3	
英文簿記	3	
青色帳簿	1	
税務会計	1.5	
会計学	3	
会計監査	1.5	
修養講座及書道	2	
【珠算専修科】		
珠算及暗算	5	
商業計算	3.5	
修養講座及書道	2	

授業科目と週授業時数
(昭和27年)

の言にその一端を窺い知ることができると、

昭和二二年正月、西片町の「村田簿記学校」の門を叩いた。当時の教室は村田校長の自宅の廊下を渡った離れの畳敷きの一間で、そこで初めて校長の警咳に接し、簿記というものを学んだ。同年七月専修科夜間部修了、翌年春校長の要請にこたえ、窓ガラスも入らぬ神保町の学校で教壇に立つことになった。

私は昼間部の講義が済むとすぐ本屋に駆けこんで、夜間部の講義に備えて立ち読み勉強の毎日。時に夜間部の教員が急に欠勤する連絡があれば、講義に穴を開けぬように急遽校長に一クラスの講義をお願いし、自分は残る数クラスの講義を掛け持ちして急場をしのいだことも幾度かあった。

飛躍の礎となる新校舎が完成

簿記学校の教育体制も整いかけた昭和二七年、一年制本科が設けられた。それまでは速成科、専攻科、珠算専修科などの短期コースで教育が行われていた。速成科の修業年限は昼間部が三ヶ月、夜間部が四ヶ月、専攻科は昼夜間部とも三ヶ月、珠算専修科（夜間部）は三ヶ月だった。（授業科目

と週の授業時数は六七頁表のとおり）

昭和二七年度の学則によると、入学金は五〇〇円、授業料（月額）は本科が一〇〇〇円、速成科の昼間部が八〇〇円、夜間部が六〇〇円、専攻科の昼間部が八五〇円、夜間部が七五〇円。珠算専攻科は二五〇円、入学金は五〇〇円、試験料は一科目につき一〇〇円となっている。

昭和二七年度の在校生数は、同年五月一日現在で八〇五名である。短期コースは毎月開校されており、同二八年四月までに卒業・修了した者の数は二二七二名にのぼる。

昭和三二年、学生数の増加に伴う教室の不足が課題であった。そのためすでに一部を借用していた万崎ビルを取得し、拠点をすべてこのビルに移した。当初は第一校舎、のちに三号館と呼び名を変えている。同三二年の学生数は二八七八名であった。

昭和三八年三月、戦後の木造校舎から一変した鉄筋コンクリート地下一階、地上五階の校舎が完成した。建築面積約一四〇〇平方メートル、普通

本科昼間部（1年制）	950	1,600
◆ 夜間部（1年制）	550	
◆ 昼間部（2年制）	100	
速成科昼間部	237	692
◆ 夜間部	455	
専攻科昼間部		27
日商一級受験料	19	
会計学科	8	
専攻科夜間部		813
日商一級受験料	167	
会社会計科	194	
原価計算科	174	
会計学上級科	203	
法人税科	75	
合 計		3,132名

昭和38年4月入学者数

教室六室のほか多目的教室二室、事務室など多彩なものであった。総工費一億五〇万円を投じ、約一年の建築期間を要した。屋上に設置された「村田簿記」のネオン塔は、他を圧して話題となった。この校舎は、第二校舎と呼ばれた。

この年四月から、本科二年制が発足した。また、同時に「村田第二簿記学校」も発足することになる。前年九月に認可された村田第二簿記学校は、新校舎を使用することを原則とし、本科一年制、二年制、速成科、専攻科から成り、教員数専門一七名、非常勤一名、事務員二名、校医一名の構成であった。

しかし、村田第二簿記学校の名称は公にされることはなく、学生、教職員は何ら区別されることはなかった。《この年度の入学者は六八頁表のとおり》

村田第二簿記学校は、昭和五一年一月村田簿記学校に統合された。この間の卒業・修了者数は約四万名である。

学生が急増した経済成長期

昭和三〇年代、簿記学校は大きな転機を迎えていた。学生の増加に伴う授業内容の充実、会計学の著しい進歩による税理士等の国家試験の難問化

など、従来の知識の上に新しい対応を迫られていた。教員は自らの学習と完璧な教材づくりに集中し、校舎に泊まり込んで作業をすることが多かった。この頃のことを元教員は「教員は教育に対する情熱の塊だった」と証言している。

昭和三〇年末から右肩上りの経済成長期となり、同四〇年以降は入学希望者が急増し、入学願書を午前中で締め切らねばならない年もあった。かつての教員たちの努力のたまものであった。

この体制は受け継がれ、やがて新学科の開講やコースの設置、三年制の導入などに結びついていった。

クラブ活動の開始

専門的能力と人間性のバランスがとれた人材の育成を目指すため、昭和六一年秋から、クラブ活動を正課に取り入れた。授業の一環として土曜日を活動日とし、施設、設備を全て開放して学生が望むクラブの活動の場を確保した。

これら正課のクラブのほかに「部」が設けられて、対外活動などで「村田」の名声を高めた。

特にバレーボール部はめざましい活躍を続け、数々の記録を残している。



昭和40年願書受付風景

平成元年度のクラブ等は下表のとおりであった。

八〇周年を機に校友会が再発足

昭和六三年九月、学園創立八〇周年を前に、第一回校友会総会が村田学園市川校舎において開催された。従来の校友会を一新し、学園発展のために活動をより活発化させるという意図であった。

この総会で、齋藤力夫氏が会長に選ばれたほか副会長一名、理事二三名、監事二名が選出された。再発足した校友会では、卒業生名簿の整備や会報の発行などが精力的に行われた。

その後は毎年一回総会が開催され、平成八年六月の総会では、齋藤力夫会長の後任に第二代校友会会長として、河合洋氏が選出された。

簿記学校が閉鎖され、校友会は必然的に解散となると、本来の目的は同窓会的な意図であるため、この機構は多くの卒業生のために現在も残されている。

国際化・情報化への対応

国際化・情報化社会に対応して、昭和六二年四月「国際ビジネス科」が誕生した。すでに同五四

年七月から教員のアメリカ研修が実施されていたが、それは学科の設置と学生の海外での研修に向けた布石であった。

昭和五八年七月、学生の第一回アメリカ研修旅行が二〇名の参加で実施された。州立ワシントン大学での語学と会計学の研修、さらにカナダ、ロサンゼルス、ハワイの観光も含まれた二週間余のコースであった。昭和六三年からは、春期も行われるようになり、平成三年夏期の終了まで恒例行事として続けられてきた。

Ⅱ 平成期 Ⅱ

多くの成果を残した「簿記学校」

平成元年、改元とともに創立八〇周年を迎え、学園にとっては創立以来最も盛大な記念行事が執り行われた。それは九〇年に向かつての洋々たる船出であった。

その後の一〇年間は入学者数の減少は見られるものの、平坦な道のりが続くことになる。しかし、この時期から教員たちは入学者確保のために、かなりの労力を費やすことになった。

一方、学生たちは対外活動を活発に行い、多く

部活動等一覧(平成元年度)

同好会		部
文理科系	体育系	
株式研究	アイススケート	野球
珠算	社交ダンス	卓球
写真	ソフトボール	サッカー
囲碁・将棋	ビリヤード	
オセロ	サッカーク	
手芸	バスケットボール	
映画	ハンドボール	
英語	ゴルフ	
観劇	ローラースケート	
茶道	エアロビクス	
書道	テニス	
美術	ジョギング	
歴史散歩	太極拳	
情報処理	ボウリング	
軽音楽・ブラス	バドミントン	
料理	ヨガ	
文芸		
カラオケ		
税法研究		

平成二二年度校友会役員			
会長	細谷 宣夫		
幹事	二名		
会計	一名		

の成果を収めている。学校新聞「かわら版」には次のような見出しが記されている。

(平成五年)

全関東で堂々の二冠達成 簿記珠算大会

全国は珠算二等、簿記四等

(平成六年)

電卓で全国制覇 珠算は二等

(平成七年)

全経関東大会 珠算は高等課程とダブル優勝

電卓二等 簿記も三等に入賞

(平成九年)

平成九年度全国珠算簿記電卓競技大会

珠算団体で準優勝 電卓部門は四位に入賞

(平成一一年)

全経協会全国大会

珠算の部で準優勝

平成一六年六月の理事会では平成一七年度経理専門課程の募集停止が承認され、同一年一月には、専門学校村田経営義塾と改称した夜間の経理専門課程の募集再開が承認されることになる。

ニーズの多様化に伴う学科変更の取組み

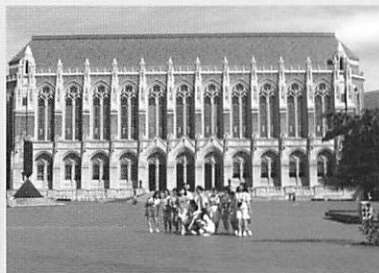
情報化社会が進むにつれ、各種の情報が生徒にも浸透していき、進学者のニーズが分散されてくる。専門的知識をより深く、あるいは一般的な知識を幅広くなど、一つの学科の中でも学び方は様々ある。そこで、平成七年度から経理情報科に「情報システムコース」(三年制・昼間部)と「情報ビジネスコース」(二年制・昼間部)を、また経理ビジネス科(二年制・昼間部)には、「マネジメントコース」「トレーディングコース」「マーケティングコース」「ファイナンシャルコース」の四コースを導入した。《各コースのカリキュラムは別表七四頁参照》

その後、税理士科を除き、各科に名称を変えたコースが誕生した。

このような状況下で特筆すべきは、「キャリア・アップコース」である。就職戦線を前にした大学、短大、専門学校の卒業生を対象としたコースで、一年間で簿記、ビジネス関連の検定試験合格とビジネス知識やコンピュータを習得することを目指すとしている。このコースは、平成八年四月から経理ビジネス科(一年制・昼間部)のコースの一



アメリカ研修旅行



学校新聞「かわら版」

つとして開講した。

社会人にも広く門戸を開放

職業教育については、あらゆる年代の人たちがその必要性を感じる時代となった。特に中高年者に求める声が多く、古くからの附帯教育は広範な分野を網羅したものとなった。

平成八年度の本科と附帯教育の講座は、次のとおりであった。

〔税理士受験講座〕

税理士本科（一六ヶ月・一二ヶ月コース）

税理士単科

〔生涯学習講座〕

簿記検定受験講座（各級）

村田OAスクール（パソコン、ワープロ、シス

テムアドミニストレータ）

宅建コース

建設業経理事務士受験講座

税の実用セミナー（所得税、法人税、相続・贈

与税、消費税）

秘書検定一・二級コース

そのほかに、各種検定試験情報、受験対策問題

や解説などの情報がFAXで取り出せる「村田スーパーFAX講座」、家庭で学べる「村田簿記通信講座」などがあった。

昭和五十六年度よりそれまでの教務部のほかに第二教務部を編成し、本科と附帯教育を中心に授業を行った。また、この年三号館と隣合せの二階建てビルを内装し、就職指導室、カウンセリングルームとして開館した。この建物は、住所の番地に因んで「ワン・イレブン館」と呼ばれた。

「専門士」の称号と大学編入学

大学卒業者を「学士」、短大、高等専門学校卒業者を「準学士」という称号に対応して、平成六年から、専修学校卒業生に「専門士」の称号が付与されるようになった。

専門士の称号を得るには、

一、修業年限二年以上

二、課程修了に必要な授業時間数が一七〇時間以上

三、試験などで成績を評価し、これに基づいて課程修了の認定を行っている

という三条件を満たすと文部科学大臣が認めた学科を卒業することが必要である。

卒業証書
税理士科

昭和 年 月 日生
あなたは本校所定の専門課程24年を修了したことを証し専門士資格取得の称号を授与する

平成 年 月 日
村田簿記学校 校長 田原 隆雄

学生数および教職員数の推移
(附帯教育を含み、経理高等課程を除く)

年度	学生数	教職員数			
		専任教員	非常勤教員	職員	合計
昭和60年度	1,638	58	16	33	107
昭和62年度	1,914	54	7	30	91
昭和63年度	1,881	49	15	32	96
平成元年度	1,826	60	7	34	101
平成3年度	2,902	74	0	43	117
平成6年度	1,337	70	5	42	117
平成9年度	759	55	3	31	89
平成12年度	328	41	1	18	60
平成16年度	181	20	9	5	34

なお、卒業証書等の表記については、カッコ書きで修了分野の専門課程名を付記することになっている。村田簿記学校の場合は、専門士（商業実務専門課程）である。

学校教育法第132条の規定に合致する学科の設置年数

設置・終了年	情報ビジネス科（夜2年制）	情報ビジネス科（昼2年制）	総合ビジネス科（昼2年制）	経理情報科（昼3年制）	経理情報科（昼2年制）	税理士科（昼3年制）	税理士科（昼2年制）	経理ビジネス科（夜2年制）	経理ビジネス科（昼2年制）	経理秘書科（昼2年制）	経理情報処理科（昼2年制）	税理士受験科（昼2年制）	国際ビジネス科（昼2年制）	簿記科（昼2年制）
昭和51														
昭和61														
昭和62														
昭和63														
平成元														
平成2														
平成7														
平成8														
平成9														
平成10														
平成11														
平成12														
平成13														
平成14														
平成18														

学校教育法第一三二条^(注)は、専修学校から大学への編入制度についての条文である。この法律は平成一一年度から施行され、村田簿記学校はこの基準に合致する学科を昼間部、夜間部あわせて一四学科を開講していた。（左表参照）

（注）学校教育法第一三二条「大学への編入」
専修学校の専門課程（修業年限が二年以上であることその他の文部科学大臣の定める基準を満たすものに限る。）を修了した者は、文部科学大臣の定めるところにより、大学に編入学することができる。

●学科編成の変遷

年度	学科名	修業期間
昭和 60 年度	簿記科	(2 年制・1 年制、昼・夜)
	第Ⅰ財務科	(1 年制、昼・夜)
	第Ⅱ財務科	(1 年制、昼・夜)
	会計士本科	(1 年 4 ヶ月制、昼)

昭和 62 年度	国際ビジネス科	(2 年制、昼)
	税理士受験科	(2 年制、昼)
	経理情報処理科	(2 年制、昼)
	経理秘書科	(2 年制、昼)
	経理ビジネス科	(2 年制・1 年制、昼・夜)
	第一税理士本科	(1 年 4 ヶ月制、昼・夜)
	第二税理士本科	(1 年制、昼・夜)
	会計士本科	(1 年 4 ヶ月制、昼)
	会計士上級科	(1 年制、昼)
	簿記科	(2 年制・1 年制、昼・夜)

平成 3 年度	国際ビジネス科	(2 年制、昼)
	税理士科	(2 年制、昼)
	経理情報処理科	(2 年制、昼)
	経理秘書科	(2 年制、昼)
	経理ビジネス科	(2 年制・1 年制、昼・夜)
	第一税理士本科	(1 年 4 ヶ月制、昼・夜)
	第二税理士本科	(1 年制、昼・夜)
	会計士本科	(1 年 4 ヶ月制、昼)
	会計士上級科	(1 年制、昼)
	速成科	(2 ヶ月制、昼・夜)
	専攻科	(2 ヶ月制、昼・夜)
	経理実務コース	(2 ヶ月制、昼・夜)
	税理士単科	(2 ヶ月制、昼・夜)
	会計士単科	(2 ヶ月制、昼・夜)
	ワープロ科	(1 ヶ月制、夜)

平成 12 年度	税理士科	(3 年制・2 年制、昼)
	経理情報科	(2 年制、昼)
	経理秘書科	(2 年制、昼)
	総合ビジネス科	(2 年制、昼)
	情報ビジネス科	(2 年制、昼)
	経理ビジネス科	(2 年制・1 年制、昼・夜)
	第一税理士本科	(1 年 4 ヶ月制、昼)
	第二税理士本科	(1 年制、昼)



まんがソロバン塾
(平成4年9月初版発行)

村田簿記学校入学式



入学式

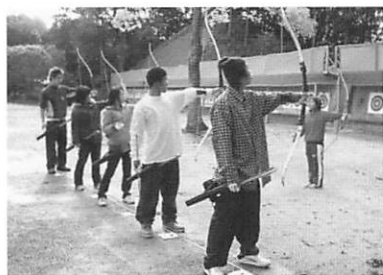
●経理情報科コース別カリキュラム

情報ビジネスコース

授業科目	1年次	2年次
	授業時間 (年間)	授業時間 (年間)
ソフトウェア	80	80
ハードウェア	80	80
プログラミング	180	120
データ管理	80	100
システム設計	—	80
表現技法	40	40
EUC概論	—	60
オペレーションズリサーチ	—	60
商業簿記	160	—
会計学	120	—
工業簿記	80	—
原価計算	—	120
管理会計	—	40
財務会計	—	40
所得税法	—	60
法人税法	—	60
経済学	40	—
商業計算	100	20
商法	—	40
ペン習字	40	—
ワープロ	20	—
英文簿記	—	20
一般教養	—	40
総合演習	120	50
合 計	1,140	1,110

情報システムコース

授業科目	1年次	2年次	3年次
	授業時間 (年間)	授業時間 (年間)	授業時間 (年間)
ソフトウェア	80	100	100
ハードウェア	80	100	100
プログラミング	180	180	40
データ管理	80	100	100
システム設計	—	80	120
システム開発	—	60	—
表現技法	40	40	40
EUC概論	—	60	60
経営学	—	—	60
オペレーションズリサーチ	—	60	—
商業簿記	160	—	—
会計学	120	—	—
工業簿記	80	—	—
原価計算	—	120	—
管理会計	—	40	100
財務会計	—	40	100
所得税法	—	—	60
法人税法	—	—	60
経済学	40	—	—
商業計算	100	20	—
商法	—	40	—
ペン習字	40	—	—
ワープロ	20	—	—
英文簿記	—	20	—
卒業研究	—	—	80
一般教養	—	40	—
総合演習	120	70	90
合 計	1,140	1,170	1,110



校外授業風景

授業風景



●経理ビジネス科コース別カリキュラム

トレーディングコース

授業科目	1年次	2年次
	授業時間 (年間)	授業時間 (年間)
経済学	40	—
経営学	60	—
戦略経営	—	40
経営分析	—	40
商法	—	40
商業簿記	280	20
会計学	80	20
工業簿記	80	20
原価計算	80	20
管理会計	—	40
財務会計	—	80
コンピュータ会計	—	20
所得税法	—	60
法人税法	—	60
情報処理	—	100
商業計算	100	20
ワープロ	—	20
総合演習	100	90
リーディング	120	80
ライティング	80	40
英会話	80	80
ビジネス英語	40	40
貿易英語	—	40
貿易実務	—	80
英文財務諸表	—	20
国際情報論	—	20
国際経営論	—	20
合 計	1,140	1,110

マネジメントコース

授業科目	1年次	2年次
	授業時間 (年間)	授業時間 (年間)
経済学	40	—
経営学	60	—
戦略経営	—	100
経営分析	—	60
商法	—	20
商業簿記	340	100
会計学	140	100
工業簿記	160	120
原価計算	120	140
管理会計	—	40
コンピュータ会計	—	20
所得税法	—	80
法人税法	—	80
英文簿記	—	20
情報処理	—	100
ペン習字	40	—
ビジネス文書	40	—
商業計算	100	20
ワープロ	—	20
一般教養	—	40
総合演習	100	50
合 計	1,140	1,110



スノーボード教室



スポーツ大会

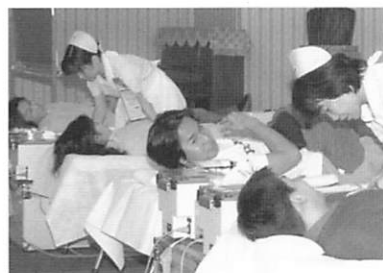
第二章 村田簿記学校・専門学校村田経営義塾のあゆみ

ファイナンシャルコース

授業科目	1年次	2年次
	授業時間 (年間)	授業時間 (年間)
経済学	40	—
経営学	60	—
戦略経営	—	40
経営分析	—	60
商法	—	40
商業簿記	300	60
会計学	140	20
工業簿記	160	60
原価計算	120	60
管理会計	—	40
財務会計	—	70
コンピュータ会計	—	20
所得税法	—	40
法人税法	—	40
英文簿記	—	20
情報処理	—	100
ペン習字	40	—
ビジネス文書	40	—
商業計算	100	40
ワープロ	—	20
一般教養	—	40
総合演習	100	90
ビジネス英語	—	40
財務管理	40	70
手形・小切手法	—	70
金融論	—	70
合 計	1,140	1,110

マーケティングコース

授業科目	1年次	2年次
	授業時間 (年間)	授業時間 (年間)
経済学	40	—
経営学	60	—
戦略経営	—	100
経営分析	—	60
商法	—	40
商業簿記	340	20
会計学	140	20
工業簿記	160	20
原価計算	120	20
管理会計	—	40
財務会計	—	80
コンピュータ会計	—	20
所得税法	—	80
法人税法	—	80
英文簿記	—	20
情報処理	—	100
ペン習字	40	—
ビジネス文書	40	—
商業計算	100	40
ワープロ	—	20
一般教養	—	40
総合演習	100	90
ビジネス英語	—	40
マーケティング	—	140
総合実践 (ビジネスシミュレーション)	—	40
合 計	1,140	1,110



献血風景



メイクアップ講座

●卒業者数(平成元年度以降)

平成5年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	2年制	税理士科	61	36
		経理秘書科	0	57
		経理情報処理科	87	109
		経理ビジネス科	160	84
		国際ビジネス科	8	7
	1年制	経理ビジネス科	28	22
夜間部	2年制	経理ビジネス科	11	18
	1年制	経理ビジネス科	8	7
総 計			703	

平成元年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	2年制	税理士受験科	52	78
		経理秘書科	0	119
		経理情報処理科	76	140
		経理ビジネス科	121	90
		国際ビジネス科	8	18
	1年制	経理ビジネス科	39	52
夜間部	2年制	経理ビジネス科	4	5
	1年制	経理ビジネス科	19	4
総 計			825	

平成6年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	2年制	税理士科	76	29
		経理秘書科	0	47
		経理情報処理科	75	64
		経理ビジネス科	133	56
		国際ビジネス科	4	5
	1年制	経理ビジネス科	22	53
夜間部	2年制	経理ビジネス科	12	5
	1年制	経理ビジネス科	10	7
総 計			598	

平成2年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	2年制	税理士科	59	56
		経理秘書科	0	108
		経理情報処理科	73	148
		経理ビジネス科	146	81
		国際ビジネス科	11	13
	1年制	経理ビジネス科	47	28
夜間部	2年制	経理ビジネス科	17	6
	1年制	経理ビジネス科	4	2
総 計			799	

平成7年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	2年制	税理士科	69	53
		経理秘書科	0	39
		経理情報処理科	34	59
		経理ビジネス科	121	81
		国際ビジネス科	2	8
	1年制	経理ビジネス科	19	40
夜間部	2年制	経理ビジネス科	16	8
	1年制	経理ビジネス科	7	8
総 計			564	

平成3年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	2年制	税理士科	73	43
		経理秘書科	0	119
		経理情報処理科	126	104
		経理ビジネス科	178	105
		国際ビジネス科	7	13
	1年制	経理ビジネス科	38	42
夜間部	2年制	経理ビジネス科	15	2
	1年制	経理ビジネス科	8	8
総 計			881	

平成8年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	2年制	税理士科	32	19
		経理秘書科	0	25
		経理情報科	28	26
		経理ビジネス科	101	44
		経理ビジネス科	10	36
	1年制	経理ビジネス科	12	7
夜間部	2年制	経理ビジネス科	12	7
	1年制	経理ビジネス科	8	8
総 計			356	

平成4年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	2年制	税理士科	60	42
		経理秘書科	0	109
		経理情報処理科	93	114
		経理ビジネス科	189	85
		国際ビジネス科	10	10
	1年制	経理ビジネス科	37	42
夜間部	2年制	経理ビジネス科	21	11
	1年制	経理ビジネス科	3	7
総 計			833	

第二章 村田簿記学校・専門学校村田経営義塾のあゆみ

平成13年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	3年制	税理士科	11	6
	2年制	税理士科	15	10
		情報ビジネス科	27	37
	1年制	経理ビジネス科	6	11
夜間部	2年制	経理ビジネス科	6	4
	1年制	情報ビジネス科	2	3
総 計			138	

平成14年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	2年制	税理士科	8	5
		情報ビジネス科	14	25
	1年制	経理ビジネス科	6	10
夜間部	2年制	経理ビジネス科	11	4
	1年制	情報ビジネス科	0	1
総 計			84	

平成15年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	2年制	税理士科	11	7
		情報ビジネス科	7	22
	1年制	経理ビジネス科	5	6
夜間部	2年制	情報ビジネス科	6	4
	1年制	情報ビジネス科	1	0
総 計			69	

平成16年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	2年制	税理士科	10	4
		情報ビジネス科	19	18
	1年制	経理ビジネス科	9	7
夜間部	2年制	情報ビジネス科	3	3
	1年制	情報ビジネス科	2	1
総 計			76	

平成17年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	2年制	税理士科	10	2
		情報ビジネス科	20	19
	1年制	経理ビジネス科	9	7
夜間部	2年制	情報ビジネス科	4	0
	1年制	情報ビジネス科	2	1
総 計			55	

平成9年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	3年制	税理士科	30	18
		経理情報科	5	4
	2年制	税理士科	23	9
		経理情報科	31	35
		経理秘書科	0	31
	1年制	経理ビジネス科	66	29
夜間部	2年制	経理ビジネス科	8	24
	1年制	経理ビジネス科	13	8
総 計			342	

平成10年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	3年制	税理士科	26	8
		経理情報科	10	5
	2年制	税理士科	19	11
		経理情報科	26	31
		経理秘書科	0	15
	1年制	総合ビジネス科	60	19
夜間部	2年制	経理ビジネス科	16	19
	1年制	経理ビジネス科	11	3
総 計			291	

平成11年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	3年制	税理士科	32	8
		税理士科	15	10
	2年制	経理情報科	28	12
		経理秘書科	0	13
		総合ビジネス科	47	17
	1年制	経理ビジネス科	15	11
夜間部	2年制	経理ビジネス科	8	4
	1年制	経理ビジネス科	6	4
総 計			230	

平成12年度

区分		学 科	卒業者数	
			男	女
昼間部	3年制	税理士科	14	9
	2年制	税理士科	7	9
		経理情報科	18	13
		総合ビジネス科	18	18
	1年制	経理ビジネス科	3	12
夜間部	2年制	経理ビジネス科	8	3
	1年制	経理ビジネス科	3	3
総 計			138	

100周年に寄せて

坂本正利先生の思い出

西尾 康三



一九七二年春、八月に実施される税理士試験のため、受験準備の講座を受講することにした。受講希望者がその年日本中で最も多かったと思われる、村田簿記学校の坂本先生、簿記論の講座である。当時、本科生として在籍していたのであるが、受講権利確保の特典はなく、前夜一二時前から順番待ちのために並んだ。

一二〇名ほどの教室に、収容能力限界の一五〇名あまりが入り、教室は熱気に満ちていた。初回の授業で講師の先生が「申し込みは一五〇名でしたが、現在一五二名の方が着席しています。二名は権利がない状況でここに居ることになります。心当たりのある方は手を挙げてください。申し出があるまで授業は始めません。」とキツパリと宣言された。皆が呆然と教卓を見つめる中、二名が手をあげ、「今から申し込んできます」といいながら席を立ちかけた。その時先生は「既に締め切ったと聞いていますが、受付で相談をしてみてください。権利が発生したら歓迎します。」と仰って、

二名を教室から外に出し、「始めます」と叫んで授業に入った。何事もなかったように熱く発せられる声は頭脳を刺激しまくった。その声のやたらと大きい、目のクリクリした先生が坂本正利先生である。

指導者というより、叫ぶ職人の香りを放つ先生で、学ぶというよりも教え込まれる感覚を強く持った。自分が今まで抱いてきた、求めなければ得られない、思いの強さが成果の大きさを生む、との思いが打ち碎かれた。教室まで辿り着きさえすれば何とかしてもらえ、その日の成果を必ず持たせて帰してくれる、と、実感した。

村田簿記学校の評価の根源は、個々の人の力の大きさ、強さであった。兵法に言う「有算者勝」の真髄は、戦いに勝つためには「需要があるか、タイミングは良いか、立地はどうか、優れたリーダーは、システムは合目的か」などに加え人の力が重要であり、それら全ての合計が戦力である。と、孫子は説いた。

100周年を迎えて、想う

橋本 一男



多分、昭和23年頃だと思う。

受付の事務室に、女子事務員が一人居た。寒い寒いと火鉢の上で手を擦っていた。たしかに寒い日でした。私は火箸で灰をどけて暖かい所を探した。しかし、その場所は、何処にもなかった。

「炭が入ってないじゃないか」と言うと、女子事務員は「炭は自分のを使うんですけど、私、今日炭を忘れたんです」と答えた。

ここまで読まれた方は、「ずいぶんケチな学校だな」と思われるかもしれませんが、実は前年、学園は空襲で焼失した校舎を再建、教職員が一丸となって再起をはかっている時だったのです。このエピソードから、当時の世相もさることながら、教職員の気概がおわかりかと思います。

後年私が研修旅行でオーストラリアに行った時は、校長からオプションの費用を充分頂きました。

普段は節約に徹するが、必要な時、将来のためには惜しまない、こうした校長の姿勢が、その後の学園の発展につながったと言えるでしょう。

100周年を過ぎて、200年にむけて更に発展してほしいと願っています。

(はしもと・かずお／元 村田簿記学校教員)

そんな教師になれたらと思いい、坂本先生に相談をし、村田簿記学校での教師生活が始まった。教え込むほどの自信はとうていないが、諦めずに思いを持ち続けさえすれば何とかなる、との思いは、一年間、連続挑戦をして税理士試験を完了させた愚弟の秘かな確信で

ある。

今も元氣にお暮らしの先生であるが、お会いする時にはわけもわからず緊張する。

(にしお・こうぞう／昭和四八年卒業、第四代校長)

MCAI

Murata Computer Assisted Instruction



簿記の知識は村田謙造が洞察したとおり、今やビジネスにかかわる総ての人に必須となっている。経理の部署はもちろん、その他の部署においてもコスト意識が業績を左右すると言われるようになり、計数的なセンスが不可欠になってきたからである。ところが一般の人にとって、就職前あるいは入社後において簿記を学ぶことは並み大抵ではない。教員には恵まれないうし、優れたテキストは数えるほどしかないのが実情であった。

この問題を解決したのがMCAIで、昭和六一年に発表された。

MCAIはコンピューターの記憶・検索・計算などの諸機能を学習活動に活用しようというものである。語学や一般教科においては完成度の高いソフトが開発されている。ところが、簿記のソフトについては、テキストの字句を単に画面上に移した程度のものしか発売されていなかった。とくに専門教科に関しては、教授上のポイントをソフト開発者が取り込んでいくことが難しく、

最大のネックになっていた。

村田簿記学校では八〇年にわたる簿記教育の実績と、昭和五五年以来の情報処理教育に関する研究成果を結集し、俵久友情報技研の協力のもと、この画期的なソフトの開発に成功した。

当時は一般向けとして「簿記入門編」と「簿記三級編」が商品化され、村田簿記学校の新入生に対する導入教育や企業の社員教育などに活用されていた。

具体的には、「簿記入門編」は、仕訳から損益計算書・貸借対照表の作成までを、また「簿記三級編」は、「簿記入門編」終了後、あるいは基本的な複式簿記の仕組みを理解している人を対象に、預貯金・商品売買・有価証券・固定資産などの項目を、パソコンを用いて容易に理解を深め、納得のいくまで学習ができるように工夫されている。

「簿記三級編」は日本商工会議所などの各団体主催の簿記検定試験三級に照準を合わせている。

村田簿記学校経理高等課程

昭和五八年、三年制の商業科開設

昭和五七年、専修学校に「高等課程」を開設している学校数は全国で七八四校（うち商業実務関係は四六校）あり、約七万三〇〇〇名の生徒たちが学んでいた。

昭和四一年頃より高校の多様化が進み、職業を主とする学科は細分化され進学者は増えたものの、やがて学歴社会の到来により、大学入学希望者が多くなり、普通科重視の傾向が強くなった。職業高校のうち、特に商業科においては、就職と直結するものと考えられていたため、公立の商業科は女子校化し、また、私立の男子校では廃止の憂き目を見るものもあった。

こうした状況のなかで、商業を学び資格を取得したいと考えている生徒・保護者の要請に応えるため、昭和五八年四月、中学校卒業者を対象とした経理高等課程（商業科・三年制・共学）を開設したのである。

高校とは一線を描すカリキュラム

高等課程は、専修学校の課程の一つである。従って、一般的な高等学校のように「学習指導要領」の制約を受けることはなく、「常にその教育水準の維持向上に努める」、「授業時数は、学科ごとに、一年間にわたり、八〇〇時間以上」などの条件はあるものの、自由に専門分野のカリキュラムを組むことができた。

教育内容をみると、簿記・珠算（のち情報処理などの情報関係に移行していくが）関係の授業は一年次に約四〇〇時間、年間授業時数一一九〇時間の三割強を占めている。一、二、三年次は情報処理、パソコン（開設当初はタイプ、ワープロ）総合実践、商業デザインなどのウェイトが高くなっている。専門教科は年間六六五時間あてられ、ほかに国語、数学、英語、体育、書道など一般教科に年間四二〇時間、ホームルーム、読書、調理実習などの特別活動に一〇五時間があてられている。

そのようななかで、高校で学ぶ生徒たちと比べ



経理高等課程校舎

て遜色がない生活を過ごさせるため、校外授業、合宿、修学旅行、体育祭、部活動、各種競技大会などの学校行事にも力を注いだ。また、教材の多くは高等学校用の教科書を使用した。

あきらめない、あせらない、一歩ずつ努力する

第一期生の募集定員八〇名に対し、八五名が入学した。専修学校として多くの実績を残している村田簿記学校は、検定受験を始めとする商業実務関連の指導方法には卓越したものを持っていたが、当初は高等課程の生徒たちに対して充分その力を発揮することはできなかった。小・中学校の学習活動のなかで疎外され、自発的学習意欲に乏しい生徒がいたからである。生徒全体に、学習指導よりも生活指導に重点を置いた学校生活を送らせることを余儀なくされた。

そこで、教室に、

一、あきらめないこと

二、あせらないこと

三、一歩一歩努力すること

という校訓を掲げ、毎日復唱させたりした。さらに、「朝起きて 鏡を見たら ニッコニコ」の教訓を実践するように指導もした。

昭和六〇年代に迎えた最盛期

五里霧中のなかで出発した高等課程ではあったが、教員たちの努力が次第に実を結びはじめ、昭和六〇年には後援会が発足し、保護者の協力も得られるようになった。この年、高等課程新聞「むらた」が創刊されたほか、部活動（クラブ活動）も活発となり、昭和六三年までの間に体育系では、全国経理学校協会主催の関東地方大会でソフトボール、バレーボール、バスケットボールなどで優勝している。簿記・珠算関係でも、同協会主催の簿記・珠算競技大会の昭和六一年度全国大会で簿記の部団体優勝、珠算の部では昭和六三年全関東大会で団体優勝を勝ち取った。

時代が平成に入る頃より、ますます部活動が盛んになる。対外試合にも積極的に参加するようになり、競技大会にも好成績を残している。

当時の部・同好会には次のものがあつた。

ソフトボール部／サッカー部

バレーボール部／バスケットボール部

バドミントン部／テニス部／卓球同好会

軟式野球同好会／軽音楽同好会

簿記同好会／イラスト同好会



昭和59年
マラソン大会

資格取得を目標に学習意欲を高める

専修学校が得意とするものの一つに、各種の検定試験に合格するための指導がある。卒業後の進路を広げるためにも、資格取得は不可欠であった。高等課程が開設時に掲げた取得目標資格の主なもの、次のとおりである。

(取得目標資格)

日商簿記検定二級 全商簿記検定一級
 全経簿記検定二級
 日商珠算検定一級 全商珠算検定一級
 全経珠算検定一級 全珠連珠算検定一級
 日商英文タイプC級 全商ワープロ検定二級
 全ビ連ワープロ検定三級
 全商情報処理検定三級
 全商英語検定三級
 書写技能検定三級 漢字能力検定二級

一五期にわたり一〇〇〇人以上の卒業生を輩出

昭和六〇年一〇月、高等課程修了者に高等学校卒業生同様、大学受験資格が付与された。このこと、またこの年一年生から三年生までの在学生が揃い、完成年度を迎えたことにより、学校全体

が活発の度を加えることとなったが、反面二年間の教育のなかで教員には深刻な悩みがあった。照子は「文部時報」(昭和六〇年七月号)に次のような感想を寄せている。

本年四月、三年六二名の、二年九八名、一年一四三名でスタートすることになった。脱落者が二年・三年にかなりある。はじめから本人の意志はなく、親の願いのみで入学させられた生徒があつたことが、かなりの数となつたともいえる。

このような実情ではあつたが、生活指導、学習指導、人格の育成などに重点を置いた教育方針が、教員・生徒・保護者から理解を得られるようになり、徐々にではあるが事態は改善されていった。

昭和五八年四月に開設し、平成一三年三月にその使命を果たし終えた経理高等課程は、その間に一〇〇〇名を超える卒業生を輩出している。卒業後の進路を見ると、多くはすぐに社会に出て活躍しているが、専門課程や他の専修学校へ進学する者が予想外に増えていった。大学、大学院、税理士という道を歩んだ者もいる。

経理高等課程卒業生数

	男子	女子	合計
1期生	46	16	62
2期生	62	23	85
3期生	62	25	87
4期生	80	56	136
5期生	75	63	138
6期生	83	35	118
7期生	71	38	109

8期生	48	30	78
9期生	27	36	63
10期生	35	34	69
11期生	19	34	53
12期生	18	8	26
13期生	15	26	41
14期生	19	6	25
15期生	16	6	22
合計	676	436	1,112

経理高等課程教員数

昭和58年度	4
60年度	17
平成元年度	24
5年度	18
10年度	10

非常勤講師を含む

100周年に寄せて

第1期生のこと

内田 隆士



学校法人村田学園は明治、大正、昭和、平成と四代に渡り、長い歲月の中で幾多の困難にもめげず、この度、百周年を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。

戦後、昭和30年以降、日本経済も徐々に復興し、東京オリンピックをめざして急激に高度経済成長期にはいり、それとともに、ベビーブームも訪れた。

やがて昭和の時代も過ぎ去り、平成の時代になると15歳人口（高校進学人口）もピークに達したが、それも長くは続かず、逆に急激な減少へと転じていった。

このような時代背景の中で村田学園は後期中等教育のなかで中学卒業生を対象とする高等専修学校教育の必要性を感じ、経理高等課程を昭和58年4月にスタートさせた。当初は大学入学資格もなく、不安もあったが、昭和60年に高等学校卒業生同様、大学受験資格も付与され、卒業後の進路も就職は勿論、専門課程、短大、大学へと幅広く選択ができた。

第1期生は85名入学してきた。経理高等課程のカリキュラムは職業科目を普通科目より重視してスタートしたが、自発的学習意欲が乏しく、元気の有り余る生徒が多くて、学習指導より生活指導のほうに費やす時間が多い時も多々あった。生活指導に関しては生活指導の先生を中心に全職員に一丸となって指導にあたってもらった。職業指導に関しては、目標を設定して、正規の時間で不足するときは補習時間で学習し、各検定試験に合格することを目標にした。一度、検定試験の合格証書を手にすると、生徒の意識も次第に変化し始め、次回からは熱心に取り組むようになった。私たちの合い言葉として「あきらめないこと」「あせらないこと」「一步一步努力すること」を各教室に掲げ、毎日復唱させた。

1期生の卒業文集の中で、「検定試験に合格するために毎日おそくまで補習授業を受けたが、あの時はきつかった。でも合格した時はとてもうれしかった。」「僕だって、やれば出来るんだ、自信がついた、何事も努力すれば必ず道は開けることも分かった。卒業しても努力して一步一步、前進したいと思います。」と綴っている。1期生の卒業生はいまでは年齢も42歳位、社会的にも中堅どころで中心的存在として活躍している年代である。中には自分で会社を経営している者、また、サービス業で店長として従業員の先頭に立って活躍している者もいる。

経理高等課程も現代の少子高齢化社会の波には勝てず、入学者数も激減し15期生をもって平成13年3月に幕を閉じたが、1期生から15期生まで1,112名の卒業生を送りだしてきた。

経理高等課程は私にとって人生の生きた教科書でもあった。いろいろな事を学習させてもらった。経理高等課程に携わっていただいた多くの先生方にこの紙面を借りて感謝の意を表することとしたい。

（うちだ・たかし／元 経理高等課程教頭）

専門学校村田経営義塾

企業経営の継承者育成に踏み出す

平成一九年四月、村田簿記学校は「専門学校村田経営義塾」として再び門戸を開放した。幅広い商業実務分野のなかから、現代社会で最も必要とされ、また、求められている「経営」を焦点としたものである。特に、視点を「働く」から「事業（経営）を行う」に移し、企業の経営ができる人材の育成を目的とした。そのため、企業の後継者や起業を志す人などを主な対象者としてカリキュラムが編成された。

入学案内で校長亀田光昭は、次のように述べている。

企業を経営するためには多くの事が求められます。

そのまず第一歩は企業の継続性の確保です。そして、次に求められるのが発展性でしょう。さらに先見性、協調性などが続く事となります。

これらの資質を求められてはいても、一朝

一夕で身につくものではありません。身につけ、さらにそれを有効に使い分けて自分の会社のために、さらに社会のために生かしていくには多くの経験と時間も必要でしょう。

しかし、今日、中小企業の経営者は、これらの資質を後継者に対し引き継ぐ時間が取れないのが現状です。そのため平成一七年度において全国四四〇万社の中小企業の内、七万社が後継者のないがために業を閉じたと報じられています。

村田学園は、この問題に正面から取り組み、企業を継承し、自らが、その業の発展を担える人材を育成する学校を作りました。明日の日本経済を力強く、そして確実に担える人材を、今日の我が国のために作り上げた立ち上がりました。

専門学校村田経営義塾の内容

学科

経営者養成科（夜間部・専門課程）



平成19年入学式

二年制・一年制

定員

各三〇名（共学）

学期

二期制（前期四月～九月、後期一〇月～三月）

授業時間

一八時三〇分～二一時四〇分（月曜日～金曜日）

授業時数

二年制 一八七二時数

（一年次、二年次各九三六時数）

一年制 九三六時数

授業科目

《下表参照》

カリキュラムの特色

教育課程の特色は、簿記関連科目の時数を多くしていることである。「商業簿記Ⅰ・Ⅱ」「工業簿記Ⅰ」は、それぞれ一年次で九〇時数を学ぶほか、「ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱ」では各界の一流講師陣を招き、講演を聴くとともに、外部の参加者との交流を通じてビジネスマンの疑似体験をしようとするもので、年間九六時数を配分している。

平成一九九年度、二〇〇年度は八九頁別表の講座が実施された（財団法人科学技術振興会共催による）。

聴講生制度

社会人にも学習機会を提供するため、学生と同じ科目を受講できるように「科目等履修生制度」及び「聴講生制度」を導入した。

委託事業

専門学校としては閉鎖のやむ無きに至ったが、従来どおり、各方面からの研修委託を受け、その教育は今も続けられている。そこに活路を開き、企業で重要視されている簿記を中心とした商業実務の教育を求める声が高くなるためのために待機している現状である。

商業簿記Ⅰ
商業簿記Ⅱ
会计学
工業簿記Ⅰ
原価計算
所得税法Ⅰ
法人税法Ⅰ
消費税法Ⅰ
商業計算Ⅰ
商業計算Ⅱ
財務分析
文書処理Ⅰ
表計算Ⅰ
Webデザイン論
パソコン会計
経営実践
情報リテラシー
経済学
商業経営
心理学
マーケティング論
ビジネスマナー
ビジネスコミュニケーションⅠ
ビジネスコミュニケーションⅡ
組織論
マネジメント論
人的資源管理論
経営法務
特別教育活動

授業科目一覧



ビジネスコミュニケーション授業

第二章 村田簿記学校・専門学校村田経営義塾のあゆみ

ビジネスコミュニケーション開催状況

	回	月 日	講 師	演 題
〔平成19年度前期〕	第1回	5月7日(月)	監査法人薄衣佐吉事務所代表社員、公認会計士／田村都彦先生	「企業行動と企業性格」
	第2回	6月4日(月)	富士屋ホテル株式会社監査役(元副社長)、早稲田大学ホスピタリティ研究所顧問・客員研究員／山口祐司先生	「Web2.0革命(ユビキタス時代)並びに会社法改正など企業環境のビッグバンに伴うこれからの企業経営」
	第3回	7月2日(月)	岸工業株式会社顧問、サッポロ流通システム株式会社前社長／大川幹雄先生	「企業の経営戦略とロジスティクス(概論)」
	第4回	8月6日(月)	岸工業株式会社顧問、サッポロ流通システム株式会社前社長／大川幹雄先生	「企業の経営戦略とロジスティクス改革の進め方(実例)」
	第5回	9月3日(月)	東京理科大学工学部教授、水素エネルギー協会前会長／斉藤泰和先生	「水素エネルギーの将来性」

	回	月 日	講 師	演 題
〔平成19年度後期〕	第1回	10月1日(月)	アサヒビール株式会社常務取締役／本山和夫先生	「アサヒビールの経営について」
	第2回	11月5日(月)	清水建設株式会社執行役員・技術研究所長／矢代嘉郎先生	「地震リスクとBCP(事業継続計画)について」
	第3回	12月3日(月)	富士屋ホテル株式会社監査役(元副社長)／山口祐司先生	「都市ホテルとリゾートホテルの経営上の問題点」
	第4回	平成20年1月7日(月)	三井不動産販売株式会社代表取締役会長／岩崎芳史先生	「サブプライムローン問題と日本の不動産」
	第5回	2月18日(月)	早稲田大学商学学術院商学部教授／片山覚先生	「企業のM&A戦略と企業価値」

	回	月 日	講 師	演 題
〔平成20年度前期〕	第1回	5月12日(月)	東洋熱工業株式会社取締役技術統轄本部長／山田博先生	「ビル空調のCO ₂ 削減対策」
	第2回	6月2日(月)	日本興亜損害保険株式会社経営企画部長／伊東正仁先生	「損害保険の直面している状況」
	第3回	7月7日(月)	ヒノキ新薬株式会社代表取締役／阿部武彦先生	「中小企業の企業理念と事業継承」
	第4回	8月4日(月)	株式会社ユウ・コーポレーション代表取締役／小西敏治先生	「建築工事におけるプロジェクト・マネジメントの必要性について」
	第5回	9月1日(月)	東京理科大学薬学部教授／田沼靖一先生	「テラーメイド医療の実現を目指してーコンピュータによる創薬についてー」

	回	月 日	講 師	演 題
〔平成20年度後期〕	第1回	10月6日(月)	学校法人村田学園理事長、専門学校村田経営義塾校長、東京経営短期大学学長／亀田光昭先生	「村田学園の経営姿勢」
	第2回	11月10日(月)	今井法律事務所 弁護士／摺木崇夫先生	「ビジネスに必須の法律知識」
	第3回	12月8日(月)	株式会社ユウ・コーポレーション代表取締役／小西敏治先生	「株式会社ユウ・コーポレーションの創業と経営姿勢(歴史も含めて)」
	第4回	1月19日(月)	株式会社フジミック顧問／河崎浩先生	「株式会社フジミックの創業と経営姿勢(歴史も含めて)」
	第5回	2月9日(月)	株式会社スベック顧問／平本秀俊先生	「株式会社スベックの創業と経営姿勢(歴史も含めて)」

村田簿記学校・専門学校村田経営義塾 略年表

明治42年11月	「銀行会社事務員養成所」創立
大正2年5月	第1回村田珠算競技大会開催
6月	村田速算学校併設
大正10年4月	神田区仲猿楽町17番地に新築移転、村田簿記学校と改称
大正12年9月	関東大震災により校舎焼失
大正13年10月	被災地に木造2階建ての校舎建設／校友会発足
昭和4年11月	仲猿楽町1番地に3階建ての校舎建設
昭和6年3月	村田女子計理学校併設
昭和12年6月	火災により校舎類焼
7月	校舎復旧
8月	学園新聞「村田学園新聞」創刊／第100回村田珠算競技大会開催
10月	村田簿記学校、速算学校、女子計理学校、3校合同校友会開催（於、目黒雅叙園）
昭和18年2月	組織を財団法人とする
昭和20年4月	空襲により校舎を焼失
昭和21年4月	校長宅を校舎として授業再開
昭和22年1月	校舎再建
昭和23年3月	組織を学校法人に改組
昭和27年4月	1年制本科開設
昭和31年4月	神田神保町1丁目の地下1階、地上5階ビル取得。拠点をここに移す
昭和34年11月	創立五〇周年にあたり、校友会より村田簿記学校校旗が寄贈される
	校友会誌「むらた」創刊

昭和38年3月	「村田学園讃歌」(詞・高橋掬太郎、曲・江口夜詩)制定、簿記学校校歌として歌い継がれる
昭和49年4月	地下1階、地上5階の新校舎完成
昭和50年3月	村田第二簿記学校発足／2年制本科開設
昭和49年4月	地下1階、地上10階の新校舎完成、学園の拠点とする
昭和50年3月	村田謙造逝去
昭和51年4月	村田照子、第2代理事長・校長に就任
昭和52年10月	簿記科(昼・2年制)開設
昭和54年4月	学校教育法に基づく専修学校として認可される
昭和56年4月	神保町1-14にある地下1階、地上8階のビル取得。のち、経理高等課程の校舎として利用
昭和57年4月	「村田学園奨学金制度」制定
昭和58年1月	第1回教員アメリカ研修
昭和59年4月	「公認会計士科」開設／本科、附帯教育を対象とした第二教務部発足
昭和60年4月	「ワン・イレブン館」開館
昭和61年3月	「北沢館」開館
昭和62年4月	学校新聞「かわら版」創刊
昭和63年1月	経理高等課程(商業科)開設
昭和64年4月	第1回学生アメリカ研修旅行
昭和65年4月	簿記科をコース制とする
昭和66年4月	経理高等課程後援会発足
昭和67年4月	経理高等課程に大学入学資格を付与される文部大臣指定校となる
昭和68年4月	経理高等課程新聞「むらた」創刊
昭和69年4月	MCAI「簿記入門編」完成
昭和70年4月	簿記科に「国際ビジネスコース」新設
昭和71年4月	MCAI「簿記3級編」完成

昭和62年3月	実務技能検定協会より秘書技能検定試験団体優秀賞を受ける
4月	簿記科を5つの科に改める／コンピューター63台導入
昭和63年1月	「風間館」開館
3月	日中友好青年バレーボール親善大会に監督1名、選手2名参加
9月	新校友会発足
平成元年4月	税理士科（昼・2年制）開設
9月	「校友会会報」創刊
平成6年4月	藤井禧和、第3代校長に就任
6月	専修学校の専門課程修了者に「専門士」の称号を付与
平成7年4月	税理士科（昼）、経理情報科（昼）に3年制開設／経理情報科、経理秘書科、経理ビジネス科にコース制導入
平成9年4月	総合ビジネス科（昼・2年制）開設
平成10年6月	西尾康三、第4代校長に就任
平成11年4月	大学編入制度始まる／キャリア・アップコース開設
平成12年4月	村田照子、第5代校長に就任／情報ビジネス科（昼・2年制）開設
平成13年3月	経理高等課程廃止／専門課程等2号館に移転
4月	経理専門課程2年制卒業者に社会保険労務士受験資格付与
8月	堀居英治、第6代校長に就任／情報ビジネス科（夜・2年制）開設
平成14年4月	経理専門課程2年制卒業者に税理士受験資格付与
平成16年6月	村田照子、第7代校長に就任
平成18年7月	亀田光昭、第8代校長に就任
平成19年4月	村田簿記学校を「専門学校村田経営義塾」と改称し再開、亀田光昭、校長に就任
8月	新パソコン導入
平成21年10月	専門学校村田経営義塾閉校

村田学園神保町ビルは、東京経営短期大学及び附帯事業等の校舎として活用されている